

少年王國記

笠井友仁

(とき)

現代。

(ところ)

海に浮かぶ孤島。島に人は住んでおらず、島の中央に鹿が生息する森がある。森の中に小高い丘があり、丘の頂上から海が見渡せる。島の南側に砂浜があり、北側に崖がある。

(登場人物) ※ 配役は初演時のもの。

アキラ (一四歳) …… 赤星マサノリ (Sunday/StarMachineProject)

タケシ (一四歳) …… コジヤパン (劇団衛星)

シンちゃん (一〇歳) …… 有北雅彦 (かのうとおっさん)

おーりん (八歳) …… しゃくなげ謙治郎 (爆劇戦線 和田謙二)

ヒロつつあん (一四歳) …… 村尾オサム (遊劇体)

ケイ (一四歳) …… 竹内宏樹 (空間 悠々劇的)

グッチ (一二歳) …… 高橋紘介

マモさん (一二歳) …… 永井翔也 (演劇集団 芝居小舎)

いわもつちゃん (一二歳) …… 藤田和広

フックくん (一二歳) …… 澤田誠

プーちゃん (一二歳) …… 岸本昌也

のりお (一〇歳) …… 山田まさゆき (突劇金魚)

プロローグ

ヘリコプターのエンジン音がする。かなり大きな音。
十数名の少年たちが飛行するヘリコプターの中にいる。
ヘリコプターが大きく揺れ、孤島に墜落する。

真夜中、孤島の浜辺に降り立った少年たちの声がする。

1日目。

アキラ この島に人はいるのかな。

タケシ 無人島だろ。

シンちゃん のど渴いた。

おーりん 帰りたい。

いわもっちゃん 腹減った。

マモさん 水あるのかな。

フツくん 明日、考えよう。

ヒロつつあん とにかく寝よう。

2日目。

グツチ 水を見つけたよ。

ケイ ここで行き止まりか。

タケシ ほら貝だ！ここに穴があれば音が出せる。ラ

ツパみたいに。

ほら貝から大きな音が鳴る。

タケシ あは（笑声）！

アキラ ホラ貝を持った者が話すことにする。

グツチ これ議会？

3 日目。

のりお ぼくたち、もう行こう。

プーちゃん どこに？

のりお (森の中の木を指差し) ほら、あそこ。

ヒロつつあん 鹿がいる。

グッチ もっと探検しなきゃ。

ケイ ぼくらが今ここにいて、誰も知らない、それが問題だ。

タケシ 出発したきり目的地に着かなかった。

ケイ きっと大人たちが搜索する。

タケシ 規律も必要だ。

ヒロつつあん アキラが議長だ。

アキラ でも、きみが狩猟部隊の隊長だ。

フツくん まずは基地をつくろう。

マモさん あいつら、どこ行ったの？

いわもつちゃん えっ、まじ、木の上！

ケイ 太平洋の真ただ中で墜落。

おーりん 誰かが、発見してくれる？

シンちゃん 日本海かも？

マモさん 変な生き物がいた。

ケイ 怪物だ。

タケシ バカ言え。

マモさん 本当だ！

ヒロつつあん だまれよ！

タケシ 不安を煽るようなやつはいられちゃ迷惑だ！

ケイ お前こそ、うっとい！

グッチ ぼくたち監視されてるって、ほんと？

アキラ 心配ない、ここはいい島だ。

ヒロつつあん
アキラ
タケシ
ヒロつつあん
プーちゃん
ヒロつつあん

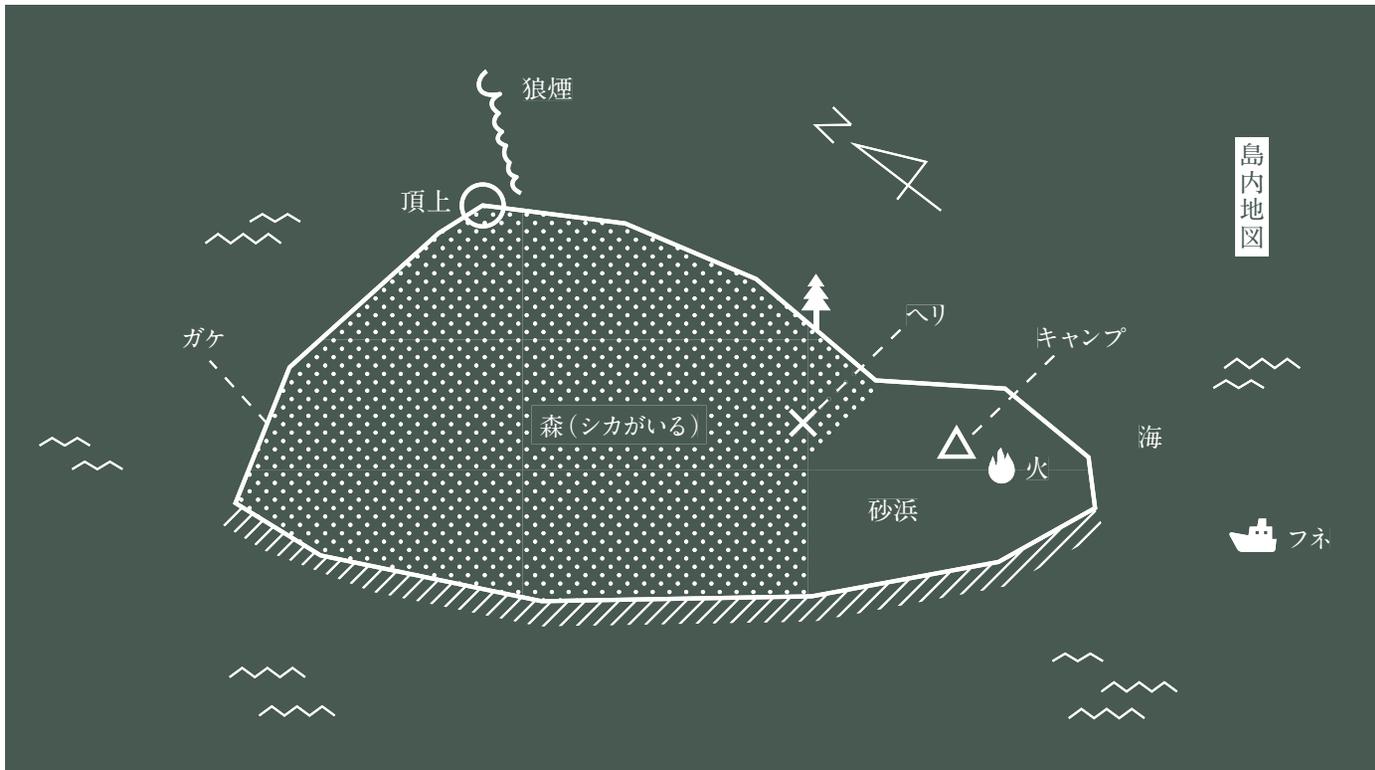
親も先生もいない。
トイレはここだ。
規律も必要だ。
魚を獲って、まともな物を食おう！
魚ムリー！
じゃあ、パンと米だけ食っとけ！

4日目。

アキラ
タケシ
アキラ
タケシ
ケイ
タケシ
フツくん
マモさん
おーりん
アキラ
おーりん
アキラ
ヒロつつあん
グッチ
シンちゃん
おーりん
シンちゃん
おーりん
ケイ
ヒロつつあん

狼煙を上げよう。
船が通るかも。
狼煙は高いところからじゃないと意味がない。
やめろ。
眼鏡をかせよ。
やめろよ。
日光を集めて。
むりだよ。
火だ。
まずい！ 消すんだ！ 火を消せ！
あつい！ あつい！
おい、早く脱げ！
おい！
誰だよ、こんなことしようって言ったの！
何時かな。
帰りたい。
でもまた地震、来るかもよ。
いやだ！ いやだ！ いやだ！
（みんなを励ますように）鹿を狩りにいこう！
鹿肉を焼いて、食べるんだ！

島内地図デザイン 山口良太



陽が暮れていく。

第1場

5日目の早朝。

薄暗い、うっそうとした森の中を「ぎっ、ぎっ、ぎっ」と足音をたてながら、シンちゃんとおーりんが現れる。

おーりん 待ってなくて、いいの？

シンちゃん いいよ。

おーりん 本当に行くの？

シンちゃん いいから、早く！

おーりん だって、待っててって言ってたよ。

シンちゃん 見たくないの？

おーりん 見たいけど。いいの？ だって、アキラくんが

待ってて。

シンちゃん いいから。

おーりん うん。

シンちゃん だって、「狩り」だよ。普通行くっしょ。

おーりん うん。

シンちゃん それにアキラくんも、絶対にいいって言うって。

おーりん だって

シンちゃん (不貞腐れて) よし。じゃあ、ここにいろよ。

おーりん ここ？

シンちゃん 見てくるから、ここで待ってて。

おーりん ここで？ 待つの？

シンちゃん うん。

シンちゃんはおーりんを一人残し、草むらの中に入っていく。やがてシンちゃんの姿が見えなくなる。おーりんは心細くなる。

おーりん シンちゃん。ねえ、シンちゃん。シンちゃん！

シンちゃんが入っていった草むらの中にケイが隠れている。
ケイは草を揺らす。「がさっ、がさっ」と草が鳴る。

おーりん (驚いて) う！ い！

「がさっ、がさっ」と草が激しく揺れる。

おーりん う！ い！ い！ シンちゃん！ う！ い、
い！

「がさっ、がさっ」と草が激しく揺れる。

ケイ (悪魔のような声で) お前は約束を破った。

おーりん はい！

シンちゃん (小さな声で笑いながら) んふ。

ケイは、シンちゃんをたたく。

ケイ 鹿を狩ることは許されない。罰を与える。

おーりん ごめんなさい。でも、ボクじゃないんです！

ケイ ほう。じゃあ、誰だ？

おーりん ヒロつつあんです。あと、他の人も。シンちゃん
んは。シンちゃんは、どうなったのですか？

ケイ 死んだ。

シンちゃん (小さな声で笑いながら) んふう、うう。

ケイは、シンちゃんをつねる。

シンちゃん 痛っ！
おーりん シンちゃん？

再び、「がさっ、がさっ」と草が激しく揺れる。

ケイ だまれ！ 静かにしないと

丘の頂上からタケシが降りてくる。

おーりん タケちゃん！
タケシ おい、ケイ！ シンちゃん！ 何してんだ！

ケイとシンちゃんは草むらから出て姿を見せる。

タケシ また、ふざけてんのか。くだらないことは止める。ケイ、前も言ったら！

ケイ お前が言うな！
タケシ ただでさえ今は忙しいんだ。いい加減にしろ。シンちゃんも付き合うな。

おーりん 心臓止まるかと思った。シンちゃん、やめてよ。

シンちゃん だって、ケイくんがやろうって。ごめーん。鹿を殺した罰かと思った。

シンちゃん んなわけないっしょ。
タケシ そろそろ、アキラたちが帰ってくる。

ケイ アキラは鹿を狩れない。鹿を狩るのはヒロっつあんだ！

タケシ ああ、もう。忙しいから早く頂上に戻ろう。ぼくたちの仕事は狼煙を守ること、遊ぶことじ

やない。火が消えたら大変なんだ。

シンちゃん

けむり〜。

おーりん

もくもく。

シンちゃん

けむり〜。

おーりん

もくもく。

タケシ

そうだ。もう煙に襲われるのは嫌だし、消しち

やいけない。さあ、早く戻ろう。

おーりん

あの子、死んじゃったの？

ケイ

そうだ！

タケシ

いいや、わからない。あの子のことは、わから

ないから、言うのは止めよう。

おーりん

だって。

タケシ

「議会」で決めたんだ。それについては話さな

いって。

おーりん

でも。

タケシ

それから「でも」とか、「だって」とか言わな

いんだ、大人は。

おーりん

なんで？

タケシ

ぼくたちは大人のように振舞わなきゃいけない。

此処には、ぼくたちしかないんだから。さあ

早く！ もう帰って来ちゃうよ。

ケイ

それはお前の仕事だ。

タケシ

一人で狼煙の番ができるわけがないだろ。お前

は馬鹿なのか！ ぼくたちの仕事だろ！

ケイ

アキラはオレのことを見てなかった。オレに

は命令していない。

タケシ

もういいよ！

ケイ

よくない！

言い合うタケシとケイの前をおーりとシンちゃんが「ぎ

っ、ざっ」と音を立てて歩いて行く。

シンちゃん　もう早く行くよ。

おーりん　鹿を頂上で待つんでしょ。

突然、草むらの中からヒロつつあん、プーちゃんがやってくる。

ヒロつつあん　おい！ タケシ！ ケイ！　何やってんだ！

タケシ　（驚いて）こいつが！

ヒロつつあん　タケシ、ケイに向かってこいつとは何だ。お前、アキラに頂上にいるように言われなかったか。

ケイ　言われてた。

タケシ　だから、今、戻ってるんだろ。

ヒロつつあん　だから、何でここにいるんだ？

タケシ　だって。

おーりとシンちゃんが笑う。

タケシ　お前らのせいだぞ！　くっ、ヒロつつあんか。

プーちゃんとケイだけなら。ふっ。3対1で、オレをやるうってんだな。しかも、ヒロつつあんが相手では、おれは負けるだろう。しかし、お前たちは知らない！

ヒロつつあん　ーうるさいよ、お前。

おーりとシンちゃんが笑う。

いわもつちゃん、グッチ、フツくん、マモさんの姿が遠くに

見える。彼らは狩りで仕留めた鹿を運んでいる。

いわもつちゃん ヒロつつあん、先行つとくよ！

ヒロつつあん ああ、すぐ行く！ プーちゃん、あっちを手伝

ってやって。

プーちゃん、静かにうなづく。

シンちゃん 鹿だ！

おーりん 肉だ！

鹿を運んでいる少年たちが去り、おーりんとシンちゃんは鹿を追って走って去る。

プーちゃん アキラくん、きつと話がしたいんだと思うよ。

ヒロつつあん そうだな。じゃあ、アキラと話したらすぐ行

く。

プーちゃん はーい。

アキラが草むらの中からやってくる。

アキラ ヒロつつあん、さっきの怪物には歯があった。

大きな目もあった。

ヒロつつあん (タケシ、ケイを気にして) おい！

プーちゃん、アキラの様子を気にしながら去る。

タケシとケイはアキラの発言に驚いている。

アキラ いいよ。タケシやケイにも聞いてもらおう。ど

うせ、次の議会で話さないといけないし。正直
言って、無理だと思う。戦うとか、口では言え
るけど。たぶん、逃げるしかない。

タケシ

え、まさか、いたの？ あの子の言ってたやつ？

ヒロつつあん

ぼくたち、狩猟部隊ならどうなんだ？ さっき

はアキラと二人だけだったし。

アキラ

昼間に様子を見るために鹿の森に行くくらいな

らしい。でも、夜は絶対にダメだ。森に入るこ

とは危険だ。

ヒロつつあん

ぼくたち、狩猟部隊なら倒せるはずだ。

アキラ

あいつの前じゃ、棒を振り回すだけの子ども

集団だ。

ケイ

なあー！ 狩猟部隊を侮辱した！

アキラ

うるさい！ わからないのか！

ヒロつつあん

わかった。でも、後で話そう。今はみんなが宴

の準備をしてる。

アキラ

そんな場合か！

ヒロつつあん

(なだめるように) アキラ、みんな、腹が減っ

てるんだ。

ヒロつつあんとケイ、去る。

タケシ

アキラくん、まさか怪物がいたの？ 昨日の火

事の前に、あの子が言ってた話は本当だったっ

てこと？

アキラ

あの子は細長い、蛇みたいな生き物だって言っ

ていた。でも、そんなやつはいなかった。

タケシ

だって、何かいたんだろ？

アキラ

今日、見た怪物はもつと大きかった。

タケシ

大きかった！ あの子はもう、煙にまかれてい

なくなっちゃった。あの子が言ったのは、そのうちの一部かも。きっと、あの子はそいつに連れていかれたんだ。

アキラ

わからない。昨日、火をつけたときは、ものすごい炎だったから。そうなのかも知れないし。わからない。とにかく危険なんだ。安全な島だと思ってたけど、実は危ないやつがいたんだ。ぼくも、ヒロつつあんも、逃げることしかできなかった。1秒くらいしか、あいつを見ていなかったかも知れない。でも、ものすごく時間が長く感じた。とにかく早く、この島から出ないといけない。

「がさっ、がさっ」と風で草が激しく揺れ、アキラとタケシは驚いて去る。

少年の頃を回想する声が聞こえて来る。

シンちゃん　あのときはとても不安だった。「避難所」に着いて眠ろうとしたとき、ヘリコプターの大きな音がした。すると突然、母さんに抱きしめられ、知らないおじさんに頭をなでられ、知らないひとに体をさすられた。大人たちに囲まれ、早くこの場所から逃れたいと思った。

ヘリコプターには男子ばかり乗っていた。「次の避難所」まで、中学生までの子どもはヘリコプターで、高校生以上の大人は車で移動すると聞いた。妹は女子用のヘリコプターに乗った。一緒にいたいと思ったけど、さすがに女子用のヘリコプターに乗るわけにはいかなかった。

ヘリコプターの中はとても揺れた。真っ暗で何も見えないし、

みんな疲れて眠っていた。

子どもたちの寝言に混じって、大人たちが言い争う声が聞こえた。子どもたちの寝言に比べて大人の声は聞きやすかった。そう言えば、そのときは母親と父親の喧嘩を思い出した。

突然、風の音が大きくなったと思うと、何人かの子どもが目を覚まし、座席に座ったままシートベルトを外さないようにという声が聞こえた。ヘリコプターの振動がより大きくなり、お尻が座席から浮かび上がりそうになった。シートベルトをきつく締めようと思ったけど、やり方がわからなかった。

第2場

5日目の午前。

森の近くの草原の中。いわもっちゃんとフツくんが鹿を解体しようとしている。

フツくん 人が肉を食べ始めたのはいつ頃か知ってるか？

いわもっちゃん 明治くらいか？

フツくん 馬鹿。もつと前から食べてんだろ。

いわもっちゃん じゃあ、江戸時代か？ それまでは魚だけだったとか。

フツくん お前、大昔の人がマンモスに槍を投げてる絵、見たことないの？

いわもっちゃん ある！ あの絵、いいよね。野性味があつて。

フツくん 石の槍だろ？

いわもっちゃん あれ、いつくらいだよ？

フツくん だから、江戸時代の前だろ。毛皮とか着てるんだよ。

いわもっちゃん いや、前は前、だけどな。

フツくん 雪の中、毛皮着て、石の槍持って、穴に落ちたマンモスを襲うんだよ。江戸時代より後のわけないだろ。フツくん、マンモスが江戸時代について思ってたの？ めでてえ。

フツくん 違うよ。

いわもっちゃん 何が違うんだよ。

フツくん もう、いいよ。

いわもっちゃん 何がいいんだよ。

フツくん もう、わかったよ。

いわもっちゃん 何がわかったんだよ。

マモさんがやって来る。

マモさん　しゃべってないで早くやろう。(サバイバルナイフを出し) 持ってきたよ。フツくん、どうした？

いわもっちゃん　マモさん、聞いて。フツくん、江戸時代にマンモスがいたと思ってるの。

フツくん　おい！

マモさん　何の話？

フツくん　いや、いわもっちゃんが勘違いして。

いわもっちゃん　勘違いしてねーし。

フツくん　もう、いいよ。

いわもっちゃん　だから、何がいいんだ

マモさん　もうそろそろ、ヒロつつあんたちも来るから早くやろう。

いわもっちゃん　オーケー。

フツくん　んだね。

マモさん　二回目だから、うまくいくかな。

いわもっちゃん　どうだろね。

3名の少年は鹿を吊るし上げ、鹿の皮を剥ぎ、鹿の解体を始める。シンちゃん、おーりんがやってきて解体の様子を眺めている。

マモさん　昨日より良くない？

いわもっちゃん　内臓、置いてきてセーカイ。まじ臭いし。

フツくん　うん。でも、臍がうまく切れないな。でも、

まあいいか。

マモさん　いわもっちゃん、そっち持って。

いわもっちゃん オーケー。

プーちゃんがやってくる。

プーちゃん 手伝いにきた。ナイフ頂戴。

マモさん そこにも一本あるからお願い。

フツくん プーちゃん、マモさんの方を手伝って。

プーちゃん はい。

少年たちは鹿の解体をしていく。

第3場

5日目の正午。

丘の頂上にグッチがいる。ヒロつつあんとケイがやっている。狼煙が上がっている。

ヒロつつあん　グッチ、火はどう？

グッチ　誰もいないし。狼煙も上がってないから。もう

消えてるかと思っただけど。火はいけそう。葉っぱを燃やして、狼煙も上げといた。

ヒロつつあん　これでアキラも満足だろ。救助、救助ってうるさいから。

ケイ　レスキュー・アキラ。

ヒロつつあん　なんだよ、それ、ケイ。

ケイ　アキラは救助ばかりだから救急隊みたい。だからレスキュー・アキラ。ヒロつつあんは狩りができるから兵士みたいでかっこいい。

ヒロつつあん　別にカッコつけてるわけじゃないよ。

グッチ　もう火を移しとくよ。

ヒロつつあん　うん。グッチ、火だけは見といてよ。

グッチ　わかった。昨日はいわもっちゃんやりたいて言うから火を任せてやったのに。あいつ、わかってんのか。

ケイ　あれは悲惨だった。

ヒロつつあん　もう火事にならないように気をつけないと。

ケイ　また死人が出る。

グッチとヒロつつあんは顔を見合わせて無言になる。

タケシが一人でやってくる。

ヒロつつあん どうした、タケシ。アキラは？

タケシ のりおを呼びに行った。みんなで話したいから
って。

ヒロつつあん おう、じゃあ、のりおもついに食えるな。

グツチ 木から降りてこれるのかな？

ヒロつつあん 登ったんだから、降りてこれるだろ。

いわもつちゃん、プーちゃん、マモさん、フックくんが鹿肉を
運んでくる。鹿の後ろからおーりんとシンちゃんがついてく
る。

シンちゃん 鹿ー！

おーりん 肉ー！

グツチ おーし、じゃあ、いきまーす！

少年たちが鹿肉を焼き始める。タケシはつまらなそうに地面
に座る。

肉が焼け、少年たちが肉を食べているところに、のりおとア
キラがやってくる。アキラは議会を召集する機会をうかがっ
ている。

ヒロつつあんが、のりおとアキラに肉を配る。肉の匂いがし
て、アキラが肉にかぶりつく。のりおは肉を眺めている。

アキラ (肉を食べながら) なあ、ヒロつつあん。

ヒロつつあん まあ、まで。みんな、座れ。みんな、肉を食べ
たか？

いわもつちゃん 飲み物もくれ！

少年たちが嬉しそうに肉にかぶりつく。その姿を見て、ヒロ

つつあんは嬉しくなる。

ヒロつつあん　ぼくの部隊に入りたいのは誰だ？

少年たち　いえーい！

ヒロつつあん　ぼくはきみたちに食べ物をやった。ぼくの部隊に入りたいのは誰だ？

少年たち　いえーい！

タケシ　なんだか、議会を召集する雰囲気じゃないね。

アキラ　ぼくは議長だ。きみたちが選んだんだ！　ぼくたちは狼煙を上げながら、島から脱出する方法を考えなきゃいけない。なのいきみたちは肉を食べてばかり。

ヒロつつあん　君も食べたじゃないか！　手に持っている骨を見ってみろ！

アキラ　きみたちは狩猟部隊だ。食べ物をとるのはきみたちの仕事だ。

ヒロつつあん　ぼくの部隊に入って楽しくやりたいのは誰だ？

少年たち　いえーい！

叫ぶ少年たちの中でおーりんは興奮している。

アキラ　どうやって島から脱出するつもりなんだ。それにほら貝はぼくが持っているんだぞ。

ケイ　今は持っていない。

ヒロつつあん　きみはあれをキャンプに置いてきた。

グッチ　島の頂上じゃ、ほら貝なんて意味がない。

アキラ　ここでもほら貝に意味がある。島のどこでも意味があるんだ。

ヒロつつあん　それでどうしようっていうんだ？

アキラ　狼煙のことを、救助のことを、それから。

おーりんがヒロつつあんに駆け寄り、ジッと見つめる。

ヒロつつあん

(おーりんの目を見て) ぼくの部隊に入りたいのは誰だ？

少年たち

いえーい！

シンちゃん

ぼく、はいる！

おーりん

ぼ、ぼくも！

アキラ

ぼくはキャンプに戻って、ほら貝を吹く。議会を召集する。

グッチ

ここまでは聞こえないじゃない。

タケシ

もう行こう。面倒なことになりそうだ。肉も食べたことだしね。

アキラ

でも…。

ヒロつつあん

みんな、肉を食べたか？ 欲しいだけ肉を食べ

たか？ さあ、踊れ！ さあ、みんな！ 踊

るんだ！ 鹿を殺せ！ みんなで殺せ！ 喉を

切れ！ 血を流せ！ 臭い内臓！ 全て出せ！

頭は下で！ 尻尾上！

少年たち

鹿を殺せ！ 皆で殺せ！ 喉を切れ！ 血を流

せ！ 臭い内臓！ 全て出せ！ 頭は下で！

尻尾上！

少年たちが踊り、歌う中、アキラとタケシが去る。

ヒロつつあんが立ち去る二人をじっと見ている。

少年の頃を回想する声が聞こえて来る。

いわもっちゃん 島に着いた翌日、ぼくたちは探検隊を派遣した。

アキラ、ヒロつつあん、グッチが代表して島を探検した結果、

海岸沿いを1時間程度歩くと島を1周できることがわかった。それから、島の周囲に陸地は見えず、中央は低い山になっていた。

島の南側に大きな砂浜があり、北側は、岩がゴロゴロある崖になっていた。島の大部分は森になっており、森には鹿が生息しているほか、大型の哺乳類や危険な生物はいない、と考えた。まあ、そう信じた。はじめは墜落したヘリコプターに積んであった食料や水を口にして暮らしてた。

第4場

5日目の午後。

のりおをのぞく、11名の少年が島の南側の砂浜につくった
キャンプに集まって話をしている。

アキラ さあ、話し合おう。

ヒロつつあん この議会は、ぼくが召集したんだ。

ケイ ふふ、ほら貝は誰が吹いても良い。これはルー
ルだ。

アキラ きみが召集しなかったらぼくがしていた。きみ
はただほら貝を吹いただけだ。

ヒロつつあん だからぼくが召集したわけだろう。

ヒロつつあんは手に持っているほら貝を掲げる。

アキラ わかった。じゃあ早く、話してくれ！

ヒロつつあん 今日、議会を召集した理由は(皆の顔を見る)、
ぼくとアキラは怪物を見た。さっき鹿を
狩った後、鹿の森の中で、眼の前に急に現れ
た。怪物はほんの何メートルか先にいた。怪物
は顔をあげて、ぼくたちを見た。あいつが何を
する気かはわからない。なんなのかもわからな
い。

いわもつちゃん (興奮して) 怪獣なら海から来たんだ！

プーちゃん いや聞の中から突然現れるんだ！

マモさん (怖くなって) ま、まさか、森の奥から！

ヒロつつあん 静かに！話を聞いてくれ。怪物は鹿の森にい
る。なんなのかはわからないが

グッチ たぶん人を待っているんだ！

フックン

狩りをする気だ！

おーりん、叫び声をあげる。

ヒロつつあん

そう、狩りをする気だ。怪物も狩人なんだ。大事なことは、ぼくとアキラでもあいつを殺せなかったということだ。そしてアキラはあいつの前では、ぼくたち、狩猟部隊も役立たないと言った。

アキラ

そんなことは言っていない！

ヒロつつあん

ほら貝を持っているのはぼくだ！アキラは狩猟部隊のみんなをビビリだと思っている。怪物から逃げるべきだと思っている。アキラはタケシみたいだ。タケシみたいなことばかり言う。議長にふさわしくない。タケシみたいに臆病なんだ。だいいち、怪物を前にぼくが前に出ようとしたとき、アキラはじっとしていた。

アキラ

ぼくも近づいたぞ！

ヒロつつあん

ぼくのあとでだ！

アキラ

ぼくも行った。それから逃げた。だけど、きみも逃げたんだ！

ヒロつつあん

じゃ、ぼくもビビりと呼べよ。アキラは狩人じゃない。みんなのために肉を手にいれたことがない。生徒会でもないし、そもそもアキラのことを何も知らない。ただ命令をだせば、みんなが聞いてくれると思っっている。議会を開いているだけだ。

アキラ

議会を開いているだけってなんだ。これは誰が始めたんだ。誰がこの議会を召集したんだ

ヒロつつあん わかった。もうわかった。アキラが議長にふさわしくないとと思うのは誰だ。手をあげるんだ。アキラが議長にふさわしくないとと思うのは。何人いるんだ。

誰も手をあげないため、ケイが手をあげる。

ヒロつつあん よし、わかった。もう一緒にやらない。ぼくは

もうアキラの仲間にいるのはいやだ。アキラは自分で鹿をとればいい。ぼくが狩りをすると、一緒にやりたいやつは、来てもいいぞ。アキラだけはダメだ！

アキラ そんなことを言ってる場合か！

グツチ なあ、ほんとに怪物がいたのか？

ヒロつつあん / アキラ ああ。 / いた！

グツチ じゃあ、そいつに見つからないように鹿の森に入ればいい。

アキラ だめだ！ 危険だ！

グツチ でも、ヒロつつあんも、アキラも逃げて来れたんだろ。

いわもっちゃん 気をつけたら大丈夫だ。

ヒロつつあん そうだ。それに狩猟部隊ならなんとかなるかも

マモさん でも、怖いんだろ。

プーちゃん そうだよ。危ないよ。

フツくん 危ないから戦うんだろ。

アキラ だめだ！ 逃げるのが重要だ。

グツチ 逃げてばかりじゃ、いつかやられるかも知れないだろ。

マモさん えっ！ 追いかけてくるってこと？

おーりん いやだ！ いやだ！ いやだ！

シンちゃん 大丈夫だよ。

ヒロつつあん そう、あいつはすぐには来ない。きっと森から出て来ない。だから、ぼくもアキラも無事だった。

アキラ だからといって、むやみに近づいたらダメだ！
大丈夫かな？

マモさん あっ、わかっちゃった！ そいつは「島の主」なんじゃない？

アキラ 「主」？

いわもっちゃん だから、「島の守り神」みたいなやつ。

グッチ 「島の主」、「主」な！

ヒロつつあん そうだ。きっと「主」だ。こっちが大人しくしてたら大丈夫だ。

グッチ いわもっちゃん、よく気付いたな！ よくいるもんな、「主」。どこにでもいるやつだ！

アキラ おい！ ふざけるんじゃない！ あれは！

ヒロつつあん いや、「主」だ。ヌーシーだ！

いわもっちゃん ぬーしー？ ヌッシーじゃない？

おーりん ヌッシー。

シンちゃん ヌッシー！

グッチ じゃあ、ヌッシーに肉を捧げよう！

アキラ、タケシを除く、少年たちは大笑いする。

少年たち 主を殺せ！ 皆で殺せ！ 喉を切れ！ 血を流

せ！ 主を殺せ！ 皆で殺せ！ 喉を切れ！
血を流せ！

少年の頃を回想する声が聞こえて来る。

グッチ (笑いながら) 8年ですか。あの頃は、友だちがいて当たり前だと思ってました。他人と仲良くすること。これが大切なことだと、よく大人から言われていましたし。

放課後、ランドセルを家に置くと、私は友だちと人気がない倉庫に行き、持っていたマッチをすり、捨ててある発泡スチロール製の箱に火がついたマッチ棒をゆっくり刺していきました。倉庫は鉄道職員が住むアパートの横にありました。熔けていく発泡スチロールに黒い模様が増えていくと、私たちは興奮しました。

島でみんなの笑顔を見ると、いつもこの記憶を思いだしていました。

第5場

森の中、のりおが海を見渡せる木の上にいる。

のりおの隣に人影が見える。その人影は全く動かない。

のりおは手鏡を持っており、太陽の光を反射させている。

「トン、トン、ツー」と、一定のリズムで手鏡を手で隠してモールス信号を送っている。

少年の頃を回想する声が聞こえて来る。

マモさん　ヒロつつあんがヘリコプターからナイフを見つけたときは、みんなから歓声が上がった。ナイフを触ったことがなく、何に役立つのか、わからない人も多かったが、武器を持っていることが、みんなの不安を和らげた。

ヒロつつあんが最初に鹿を仕留めたのは幸運だった。ヒロつつあんが鹿を狩る方法を考えていると知ったグッチは、一日かけて罠を作り、鹿がかかったらみんなで囲いこみ、追い詰めて、ナイフで刺すように提案した。そして、少年たちは狩猟部隊を名乗り、鹿を追うようになった。

若い雌鹿の首から血が流れたとき、みんな歓声を上げた。鹿の首にはヒロつつあんのナイフが刺さっていた。

解体はフックくんが行った。フックくんは父親と狩りをした経験があった。島では、手順を間違えても指摘する人がいないから、解体も楽しかった。解体して初めて血や内臓と肉の違いを知り、特に強い臭いを放つ内臓に注意するようになった。

解体が終わると、タケちゃん眼鏡の出番だった。嫌がるタケちゃんの体を抑え、顔からメガネを剥ぎ取り、メガネのレンズに太陽の光を集めて、枯れ草に焦点を当てた。すると、あつと言う間に火が起きた。

そしてまもなく、大惨事が起きた。大量に用意した狼煙用の枯れ草に火が燃え移った。草は大量の煙を出し、煙で何も見えなくなった。

そのうちに一人の少年のシャツに火が着いた。名前がわからない少年。あの子は突然のことに驚いて、走り出し、熱い、熱いと叫んだ。その影が煙の中に写ったと思うとまもなくして、その影が消えた。

狼煙を上げることが提案したのはアキラくんだった。島から脱出する方法として、島の周囲を航海する船や飛行するヘリコプターに助けってもらうことを考えた。狼煙を上げれば、発見してもらえる機会がぐっと増すはずだった。

5日目の陽が暮れていく。

第6場

6日目の早朝。

朝日が昇り、砂浜のキャンプにシンちゃん、おーりん、ヒロつつあん、ケイ、プーちゃん、いわもっちゃん、グッチがいる。

ヒロつつあん、ケイ、グッチ、いわもっちゃんは顔を汚している。シンちゃん、おーりんは顔を汚すための染料を作り、運んでいる。プーちゃんはそれを見ている。足元にサバイバルナイフと木を削って作った槍が置いてある。

グッチ

（楽しそうに）「主」には、ぼくたちの臭いはわからない。だけど姿は見えると思う。何か肌色のものがあるって。

いわもっちゃん

緑色もあるとイイんだけどな！

プーちゃん

戦争のとき着るやつみたい。

ケイ

迷彩！

グッチ

木や草に見えるようにするんだ。

プーちゃん

木にとまった蛾みたい。

グッチ

うるさい！

ヒロつつあん

二人とも、早く持ってこい！

いわもっちゃん

プーちゃん、やんねーの？

プーちゃん

うーん。

ケイ

プーちゃんは肌を気にしている。

グッチ

葉っぱをすり潰して緑色を作ったらどうだ？

ヒロつつあん

今度、そうしよう。

グッチ

お前たち、次は緑の葉っぱを集めておくんだ！

シンちゃん

でも。

おーりん

ぼくたち。

グッチ

言うことを聞け！

おーりん だって。

シンちゃん 木の实より楽かもよ！

おーりん (嬉しそうに) あっ！

グツチ 木の实も集めるんだ！

シンちゃん えー！

おーりん やだー！

ケイ (ナイフを手に持って) ぐさっといくぞ

ヒロつつあん ケイ！ さあ、みんな隊列を組むんだ。さあ早

く！

ケイがシンちゃんとおーりに石を投げる。

ケイ 石ミサイル！ 直撃！

ヒロつつあん ケイ！ 行くぞ！ シン、おーりんも来い！

ヒロつつあん、ケイ、プーちゃん、いわもっちゃん、グツ

チ、シンちゃん、おーりんが隊列を組み、森に入っていく。

森の中では、鹿を発見したフツくとマモさんが手招きして
いる。

少年たちの鹿狩りが始まる。

第7場

6日目の午前。

砂浜にテントを立てながら、アキラとタケシが話している。

タケシ

ずっと時計のことを考えているんだけどね。日時計を作るってのどう？ 砂に木をぶっ刺して。

アキラ

(皮肉っぽく) 飛行機も作るといいよ。電気もね。

タケシ

それには材料がたくさんいる。金属もないし。でも、木の棒ならあるから。

アキラ

棒はたくさんあるから、みんなひとつずつ日時計を持つといいね。そしたら時間がわかるから、めちやくちや役に立つだろうな。そしたら規則も守る。

タケシ

(怒って) きみがいろんなことをしなくちゃいけないといったから考えてるんじゃないか。救助されるために。

アキラ

ああ、もううるさい

アキラは海上に目をやる。

タケシ

うるさいって、なんだよ。ここは議会じゃないから、ぼくも好きに発言させてもらう！ ぼくだってここにいたくない。早くうちに帰りたい！ みんな、子どもっぽいし。最初だけだ。大人のいない時間が楽しかったのは。もう5日か、6日目だ。(考えて) 墜落してから6日目だ！ つまり144時間。狼煙を上げてから3

日目。人間の鼓動は1分間に…。

アキラ
―船だ！

タケシ
えっ？

アキラ
船だ！

タケシ
どこ？ 船？

アキラ
こっちの狼煙が見えるはずだ！

タケシ
ほんと？ きっと小さな船だ。ぼくには見えな

いし。ついに！ よーし（頂上を振り返り）。

ん、よく見えないんだけど、煙出てる？ 頂上

の狼煙のことだよ。アキラくん！ ね、どうな

の。狼煙はあがってる？ なあ、教えて！ 狼

煙はあがってるの？

アキラ、頂上を見て、血相を変えている。アキラは頂上に向
かって駆け出す。

アキラ
タケシ！ 眼鏡！ 火が消えていたら、メガネ

が
いる！

タケシ
え？

アキラ
今日の当番は誰だ？

タケシ
フツくんとマモさんかな？

アキラ
おい、くそ！

アキラは頂上に向かって走って行く。

アキラ
きっと船は戻ってくる！ 早くきてくれ！ あ

いつら、火を消しやがった！

タケシも頂上に向かい走って行く。

第8場

6日目の正午。

島の頂上に少年たちがいる。

少年たちは鹿を解体している。

アキラがやってくる。

アキラ

あいつら！

少年たち

鹿を殺せ！ 皆で殺せ！ 喉を切れ！ 血を流

せ！

フックン

（アキラを見つけて）見ろよ！ 鹿をまた殺し

たぞ！

マモさん

鹿を囲んで。

フックン

そっと近づいて。

マモさん

鹿はきいっと鳴いて。

アキラ

おい！ 狼煙を消したろう！

ヒロつつあん

火ならまたおこせばいい。フックンが鹿を見つ

けたんだ。最短記録だよ。狩猟部隊の練度が上がった証拠だ！ きみも一緒に来ればよかったな。最高だ。おーりん、なんてはね飛ばされて鹿にあたってさ。

フックン

おーりん

だっていきなり来たから。

ヒロつつあん

ぼくは走る鹿の喉を切ったんだぞ。アキラのナ

イフも貸してくれないか。柄に刻み目をつけたんだ。昨日は悪かった。血がな、びゅつと出たよ。見せたかったな！ これから毎日狩りにいくぞ！

アキラ

きみたち火を消しただろう！

ヒロつつあん

ふたりの手も借りなきゃいけないかったんだ。で

ないとこんなに早く殺せなかった。火が消えた

といっても、ちょっとだけだろう。また燃やせばいいんだ。

アキラ

船が見えたんだ！ 船が見えたんだ！ 沖合いに。火を絶やさないと約束したくせに、消してしまった！ 家に帰れたかもしれないんだ。血がどうしたってんだ！ おい、ヒロつつあん！ 狩りがなんだったんだ！ ぼくたちは家に帰れたかも。

おーりんが海を見る。

アキラ

リーダーはぼくだ。きみはぼくのいうことを聞かなくちゃいけないんだ。きみは威勢のいいことばかりいう。でも、それだけじゃ、島から脱出できない！ しかも狩りに夢中になって、火を消してしまった。船が見えたんだ！ 狩りは大変なんだ。人手がいるんだ。肉がいるんだ。みんな、腹が減って。

ヒロつつあん

タケシがやってくる。タケシの肩がおーりにぶつかり、おーりんの手から鹿肉が落ちる。タケシは思わず、鹿肉を踏んでしまう。

タケシ

船が来た！ なのに、きみたちは。煙を消さないって決めたのに。

少年たちはタケシに踏まれた鹿肉を見ている。

ヒロつつあん

ああ、そうか。このメガネ！

ヒロつつあんがタケシを殴り、タケシのメガネが落ちる。

タケシ

ぼくのメガネ！ 片っぱのレンズが割れてる。ぼくにはメガネがいるんだ。マストアイテムなんだ！ これでもう片目しか見えなくなった。見ろ！ ぼくは片目しか見えないんだぞ！

ヒロつつあん

ああ、見ていてやるよ！

アキラ

おい！

ヒロつつあん

わかった、わかった！ 悪かったよ。火のことは。そのことは、あやまる。

アキラ

なんだと！ もういい。火を燃やして、すぐに狼煙を上げる！

ヒロつつあん

いやだ！

アキラ

なんだと！

ヒロつつあん

もう出て行く！ ぼくは自由に生きたい！ 狩りをして暮らす。

アキラ

救助が来てモカ？

ヒロつつあん

救助が来る！ そんなことわからない。船だつて本当に来たのか！ わからない。来ればその時に考える。アキラとは一緒にいられない。

ヒロつつあんは少年たちを見つめる。

ヒロつつあん

皆もよく考えろ。肉を食べながら、島から出る方法を考えることだってできる。

ヒロつつあんが去り、ケイがそれに続く。そして次々に少年たちが去って行く。

アキラ、タケシ、シンちゃん、おーりんが残る。

タケシ 船は確かに来た。ぼくには見えなかったけど、確かに来たんだ。そうだろ？

アキラ ああ、確かに船だった。

タケシ あいつらはアキラくんの努力をわかってない。ぼくは家に帰りたい。ほんとに帰りたい。だから狩りより狼煙のほうがずっと大事だ。もうぼくたちだけで暮らしていこうよ。四人だけで。

アキラ 四人だけか。それじゃ、きっと火を燃やし続けられない。

タケシ やってみようよ。ほら、火はぼくがつけたんだ

アキラ お前たちも行っても良かったのに。

シンちゃん ううん。

おーりん こっちがいい。

少年の頃を回想する声が聞こえて来る。

おーりん ぼくたちは皆、島に来てから知り合った。あっ、正確には違った。ヒロつつあんとケイだけは幼馴染みだった。他は皆、名前も学校も知らなかった。だから自己紹介をする必要があったんだけど、小さい子たちがうるさくて、どうしても自己紹介がうまくいかなかった。だから司会を決めることになった。自己紹介だけの司会だ。それをアキラくんがやった。めんどくさいから誰もやりたくなかったし、ヒロつつあんも自己紹介の司会はいやだった。自己紹介が終わると、タケちゃんが島での生活のルールを決めようと言って、そのまま、アキラくんが議長に就任した。議会を召集するさいは海岸で拾ったほら貝を吹くことになった。そして、議会で発言する人は、そのほら貝を持つことになった。そうして発言する人と発言を聞く人の区別がはっきりした。けど、発言する人が限られるようになった。

第9場

6日目の夕方。

島の北側にある崖の上にマモさん、いわもっちゃんがいる。
グッチがやってくる。3名とも顔を汚している。

マモさん 止まれ！ 誰だ！

グッチ グッチだ。

マモさん よし、前に進め！

グッチ 誰だか、見りやわかるだろう？

マモさん 誰が来ても、名前を聞くと隊長に命令されているんだ。

グッチ そうだけど。ぼくが勝手に登って行ったら、お前たちじゃ、止められないだろう？

いわもっちゃん (勇ましいポーズで) そうかな。じゃ登ってくるといい。

グッチといわもっちゃんがもみ合う。

ヒロつつあん、フツくん、ケイ、プーちゃんがやってくる。プーちゃんは手首を縛られている。皆、顔が汚れている。

フツくん おい！ 帰ったぞ！

いわもっちゃん 彼は本物の隊長だな！

ヒロつつあんがプーちゃんを崖の陰に連れ去る。

ケイ 隊長はプーちゃんを殴る。

マモさん どうして？

フックン

わからない。隊長は何も言わない。怒って、プーちゃんを縛りあげると命令した。

マモさん

隊長は理由を言わないのか？

フックン

ぼくたちは聞いてない。

ヒロつつあんが戻って来る。

ヒロつつあん

明日、また狩りをする。何人かはここに残って砦を居心地よくしたり、門を守ったりするんだ。ぼくは何人かの隊員を連れて肉をもってくる。門の警備部隊は例の連中が忍び込まないように気をつけること。

いわもっちゃん

やつら来るかな？

ヒロつつあん

来る。ぼくたちのやっていることをめっちゃくちゃにするために。だから警備部隊は用心しなくちゃいけない。それと「主」がやってくるかもしれない。お前たちは見たことがないが、やつは這ってやつてくる。だから注意深く見張るんだ。

マモさん

（「主」に怯えて）でも、ぼくたち、「主」に殺されるんじゃない。

ヒロつつあん

そうならないように、今、鹿の首を森の中に置いてきた。グッチには森の中に捨てた内蔵を取ってきて、砦の周りに撒くように言ったが。

グッチ

大丈夫。任務完了だ。

ヒロつつあん

あの強烈な臭いで「主」もやって来れない。

マモさん

「主」は変装してくるんじゃないかな。

ヒロつつあん

（マモさんを安心させるように）「主」とは、うまく付き合っていくしかない。そして、明日

も狩りに行く。肉を手に入れて、宴会をして。

フックン 隊長。

ヒロつつあん なんだ。

フックン 火を、どうやっておこせばいいんだろう。

ヒロつつあん うん。火は例の連中からとってやることにしよう。いいか、明日は狩りをして肉をとる。だが

その前に、今夜、ぼくは3名の隊員を連れて出撃する。強襲部隊だ。一緒に行きたいのは誰だ？

いわもつちちゃん、グッチ、フックンの手が挙がる。

ヒロつつあん 他の隊員は陽が沈んだら寝ていい。それまでは

しっかり警備をするんだ。でも、ぼくたち、強襲部隊は陽が沈むちよつと前に出発する。夜の森は危険だから、浜辺を歩いて行く。日の出とともに強襲するんだ。

フックン でも、もし途中であいつらと出くわしたら

ヒロつつあん あいつらと出くわしたら、鹿を狩る時と同じだ。

ヒロつつあんは槍を手に取り、岩に向かって投げつける。

槍は岩にあたって跳ね返る。

少年の頃を回想する声が聞こえて来る。

フックン ヒロつつあんは、プーちゃんに「主」の様子を話した。

ヒロつつあんは、「主」の怖さを伝えようとした。ところが、その話を聞いたプーちゃんが、「主」は人間なんじゃないか、って言った。アキラくんとヒロつつあんが「主」を見たとき、プーちゃんはきつと主の姿を見たんだと思う。遠くから。その後、ヒロ

つつあんとプーちゃんはボクたちから少し離れたところに行き、戻ってきたヒロつつあんがプーちゃんの手を縛るように言った。そして、砦に戻ったら、プーちゃんを殴ると言った。ほくもヘリコプターから飛び出した人が何人かいたことを知っていたから、そう考えたけど、黙っていた。あるとき、そのままヘリコプターにいても助からないと思ったけど、どうしたらいいか、わからないから、ヘリコプターの中にいた。だって、すでに大人の姿は無かったし。

第10場

7日目の早朝。

砂浜のテントに4名の少年が忍び寄り、タケシのメガネを奪い、去って行く。

アキラ ぼくが見えるかい。

タケシ ぼんやりとね。

シンちゃん メガネをあいづらが持っていていった。

おーりん あいつらが盗んだんだ。

タケシ そう、あいづらの仕業だ。おかげでぼくは目が見えない。結局、ヒロつつあんってそういうやつなんだ。議事を召集してよ、アキラくん。どうするか決めなくちゃいけない。

アキラ ぼくたちだけの議会かい？

タケシ それしかない。おーりん、ちよつとつかまらせよ。ほら貝を吹くんだ。できるだけ大きな音で。

アキラはほら貝を吹く。「ブオー」と、ほら貝の音が響く。そして、ほら貝をタケシに渡す。

アキラ じゃあ、発言してくれ。

タケシ ぼくがほら貝を持ったのは、このことを言うためだ。ぼくはもう目が見えない。メガネを取り返さなくちゃいけない。この島では怖ろしいことが起きている。ぼくはアキラくんこそリーダーだと思っっている。ぼくたちが島から脱出する方法を考え、行動しているのはアキラくんだけだ。だから言ってくれ、アキラくん、どうした

らいいか。(泣くのをがまんしながら) そうでないよ。

タケシはアキラにほら貝を渡す。

アキラ

ただ普通に焚き火を守る。それくらいできそうなものじゃないか。狼煙をあげて、救助してもらおう。ぼくたちはマンモスを追いかける原始人なのか、どうなんだ。いま、狼煙は上がっていない。近くを船が通っているかも知れないのに。昨日、あいつらが狩りに出かけているあいだに、火が消えて、そのとき船が通りかかった。なのにみんなはあいつともに行ってしまった。それから、タケシの目が見えなくなつた。そしてあいつらは。ぼくたちの火を盗んでいった。盗みをした。頼まれば、火を分けてやったし、メガネだって貸したはずだ。なのに盗んでいった。ぼくは。

タケシ

で、どうする気なんだ、アキラくん。ぼくはメガネを取り返したいんだ。

アキラ

いま考えようとしているんだよ。こうしたらどうかな。体を洗って、髪をとかして、昔みたいなちゃんとした恰好になって、乗り込むんだ。だって、ぼくたちは原始人じゃないんだし、救助されるかどうかは、ゲームなんかじゃなくて。身だしなみを整えて行くんだ。

シンちゃん

槍を作って持ったほうがいい。あいつら怖いんだ。

アキラ

ほら貝をもたずに発言しちゃだめだ。

タケシ

きみたちは槍をもってもいいけど、ぼくはやめとく。意味がないからね。犬みたいに紐つけて連れてつてもらわなきゃいけないくらいだ。ああ、笑っていいよ。ほら笑いなよ。むこうの連中はどんなことでも笑うだろう。家に帰ったら先生たちに言っつてやるよ。メガネを盗まれたつてね。

アキラ

ひどい目にあうぞ。

タケシ

これ以上の何をされるつてんだ。ぼくははっきり言っつてやる。ぼくにほら貝を持っつていかせて。あいつが持っつていないものを見せつてやるんだ。規律に勝るものはないんだから。ぼくはこつう言っつた。いいか、きみはぼくより強いし、両目でちゃんとものが見える。だけつど、ぼくはきみに眼鏡を返してくれとお願っつしたりはしない。卑怯な真似はやめてくれと頼んだりもしない。正しいことは正しいことだから、返せと要求するんだ。さあ、眼鏡を返せ、返さなきゃだめだ！ ぼくはそういつつてやるんだ。

アキラ

いいだろう。きみのやりたいようにやるつといい。よし、何か食べて、それから出発しよう。ぼくは手をひいてもらわなきゃだめだけつどね。むこうは顔に色を塗っつているよ！

おーりん

あれはすごく。

アキラ

いや、ぼくたちは色を塗らない。原始人じゃないんだから。

おーりん

だけつど。

アキラ

顔は塗らないんだ！ 学校に行くつために、ちゃんとした格好で行こう。体も洗っつて。

第11場

同刻。

岩の岩の中、両手を縛られたプーちゃんが泣いている。ケイがやってくる。ケイは手に鹿の骨を持っている。

ケイ どうした？

プーちゃん 何が？

ケイ いや？

二人は黙ったまま、互いの顔を見ている。

プーちゃん それ、どうしたの？

ケイ ここに保管しておく。

プーちゃん 骨を？

ケイ 使える。

プーちゃん 何に？

ケイ 色々。

プーちゃん そうかね？

ケイ 材料になる。削って。それから背骨には骨髄液

が入ってる。

プーちゃん うまいの？

ケイ さあ。きつと力がつく。

プーちゃん そう。

ケイ ヒロつつあんは、ぼくたちのリーダーだ。

プーちゃん うん。

ケイ きみのことも、大切に思っている。

プーちゃん うん。でも、なんだか疲れた。

ケイ 疲れたなら、休めばいい。

プーちゃん 骨は、どんな動物でも白いね。お父さんの骨も

白かった。焼け残った骨。強い炎で焼いたから、骨が乾いていて、軽くて、まるでお父さんの体が空気と混じり合ったみたいで。残った骨はカスみたいだった。でも、この鹿の骨はカスに見えない。重さがあつて、力が宿っているみたいだ。

ケイ

鹿はまだあの世に送られていない。十分に使つて、それからあの世に送られる。

プーちゃん

死んだ後も使われるんだね。

ケイは骨を削って作った槍を取り出す。

ケイ

そう。大切に使っている。

第12場

7日目の午前。

岩ばかりの崖をアキラ、タケシ、シンちゃん、おーりんが歩いている。

タケシはシンちゃんとおーりに手を引かれている。

アキラ

きみたち二人はしんがりを頼む。ぼくが先頭で、タケシが一步後ろ。きみたちは槍を構えておくんだ。

タケシ

危なくない？ 崖があるんじゃないの？ 波の音が聞こえるけど。

シンちゃん

ぼくたちが手を持つてるから大丈夫。

おーりん

怖がるなって。

タケシ

ほんと？ 危なくない？ なんか怖いよ。

崖の上にマモさん、ケイがいる。

アキラ

(タケシに) ほら貝をぼくにくれ。じつとしてるんだぞ。

マモさん

止まれ！ 何者だ！

アキラ

何者かなんて見ればわかるだろう！ 馬鹿な遊びはよせ！

マモさん

みんな気をつけろ、わかっているな。

アキラ

議会を召集する！

タケシ

置いてかないでよ。

アキラ

きみはしゃがんでいろ。ぼくが戻るまで待っているんだ。(マモさんとケイに向かって) ぼくは議会を召集する。

ケイがアキラに石を投げる。

アキラ 議会を召集すると言っている。ヒロつつあんは

どこだ？

マモさん いま狩りをしている。きみを中心に入れちゃいけないと言っていた。

アキラ 火のことで話してきたんだ！ それとタケシの眼鏡のことで。

ヒロつつあん、フツくん、いわもっちゃん、グツチがやってくる。

ヒロつつあん 何の用だ！

タケシ アキラくん！ ぼくを置いてかないで！

崖の少年たちが笑う。

ヒロつつあん 帰れ、アキラ。自分の縄張りにいろ。ここはぼくとぼくの部隊の領地だ。ぼくのことにかまうな。

アキラ きみはタケシの眼鏡を盗んだ。返さなきゃだめだ。

ヒロつつあん 返さなきゃだめだ？ 誰がそう言っているんだ。アキラ ぼくが言ってるんだ！ きみたちはぼくを議長に、リーダーに選んだ。ほら貝の音が聞こえなかったか？ きみは汚い手を使った。頼んでくれれば火は分けてやったんだ。メガネだって貸した。きみたちも好きなきみに火を熾せたんだ。でも、きみは頼みにこなかった。泥棒みたいに、こっそりやってきてメガネを盗んだ！

ヒロつつあん もういつぺんいつてみる！

タケシ 泥棒！ 泥棒！

ヒロつつあんがアキラに殴りかかる。アキラはかわして、ヒロつつあんに殴りかかるが、ヒロつつあんもかわす。

ヒロつつあん 誰が泥棒だと？

アキラ きみだ！

ヒロつつあんがアキラに殴りかかり、ヒロつつあんの拳がアキラの顔面に当たる。アキラはすぐに反撃してヒロつつあんを殴り返す。

アキラ さあ来い！

ヒロつつあん そっちこそ来い！

アキラ ほら、来てみる！

タケシ アキラくん、ここに来た目的を思いだしてくれ。火だよ。ぼくの眼鏡だよ

アキラ いいか！ ぼくたちの用件はこうだ。まず、き

みたちはタケシにメガネを返さなくちゃいけない。タケシは眼鏡がなきゃ何も見えないんだ。きみたちのやり方は。

崖の少年たちが笑う。

タケシ 火のこと。

アキラ ああ、そうだ。火のこともある。もう一回それをいう。ぼくたちがこの島にきてから、何べんも言ってきたことだけど。明るいうちはとにかく

く狼煙をあげなくちゃいけない。それがぼくたちのただひとつの希望なんだ。船が狼煙に気づいて、ぼくたちを救助して、家に連れて帰ってくれるかもしれないから。狼煙をあげなかったら、船が偶然この島に来るまでずっと待つてなくちゃいけない。何十年も待たなくちゃいけないかもしれない。そのうちぼくたちは年をとつて。

崖の少年たちが笑う。

アキラ

きみたちにはわからないのか。馬鹿みたいに化粧を塗りたくって。タケシとシンちゃんとおーりん、ぼく、この4人だけじゃ足りないんだ。危険な森を抜けた、あの頂上で火を燃やしつづけることができない。もちろん、食事も必要だ。だけど、わからないのか。こうしてるうちに船が。

アキラは、笑いつづける少年たちの不気味さに怖気付く。

ヒロつつあんはおーりんとシンちゃんを睨む。

ヒロつつあん

その二人！ 二人を捕まえろ！ 捕まえろと

言っているんだ！

シンちゃん

おいちよつと！

おーりん

やめてくれ！

グツチ

縛りあげろ！

アキラ

ヒロつつあん！

ヒロつつあん

さあやれ！ 縛りあげろ！ 見たか。みんな、ぼくの命令を聞くんだ。

アキラ

おまえは最低だ！

タケシがほら貝をチカラいっぱい吹くがなかなか音が鳴らない。ほら貝から情けない音が出る。
崖の少年たちは笑う。

タケシ

ぼくに話をさせてくれ。ぼくはほら貝を持って
いるんだ。わかるか、ほら貝を持っているんだ
ぞ！ ぼくが言いたいのはこのようだ。きみたちは
まるで子どもの集団みたいなことをやってる。
どっちがいいんだ、顔をペイントして野蛮人の
集団でいるのと、アキラくんみたいにわけのわ
かった人間でいるのと。

崖の少年たちが叫ぶ。

タケシ

どっちがいいんだ！ ルールを守って、みんな
で協力して暮らしていくのと、野蛮な生活をす
るのと。どっちがいいんだ。規律を守って救助
されるのと、狩りをして、いろんなものをめち
やくちやにしていくのと。

ケイがタケシの手からほら貝を奪い、ほら貝でタケシの頭を
強く殴る。「ドン」と鈍い音がする。タケシは倒れ、ほら貝
が碎ける。少年たちは静かになり、ほら貝の破片を見つめ
る。ケイだけが小さく笑う。

ヒロつつあん

(アキラに) 見たか？ 見たか？ おまえもあ
れと同じ目にあわせる。お前にはもう仲間はい

ない！ ほら貝もなくなった。ぼくがリーダー
なんだ！

アキラは逃げだす。

崖の少年たちはアキラを追いかける。

第13場

7日目の夕方。

のりおが木の上にいる。のりおの隣に人影が見える。

人影は全く動かない。

のりおがいる木の下に崖の少年たちが集まる。

のりおは手鏡を持っており、ちらちらと光っている。のりおは遠くを見つめている。

マモさん のりお！

フツくん 降りてこい！

グツチ そこは狩猟部隊が占領する！

マモさん 早く！ 降りてこい！

フツくん おい！

のりおは木の下を見て、また遠くを見つめている。崖の少年たちはのりおの隣の人影に気づく。

いわもっちゃん なあ、あれ。のりおの隣。

フツくん 何。

いわもっちゃん おい、見ろ。

グツチ アキラか？

いわもっちゃん いや、違うくない？

マモさん あれ、のりおの

グツチ まじか！

マモさん のりお！

ヒロつつあん もう、いい。行くぞ！

崖の少年たちが去る。

少年の頃を回想する声が聞こえて来る。

のりお　生まれたときから一緒でした。一日でも早く、一緒に家に帰りたいかった。持っていた手鏡に太陽の光を反射させて、三回ずつ、手で鏡を覆いました。どっちの方向に光を当てたらいいかわからなかったから、少しずつ方向を変えながら、繰り返していました。ぼくたちは水だけ持って、木の上に登りました。一度だけ、アキラくんに言われて、木から降りて話し合いに参加しました。でも、みんなと居ても家に帰れるか、わからなかったから、木の上に戻って、鏡を持っていました。死んでいることは知っていました。だけど、ずっと一緒に居たから、そばにいるようにしました。ヘリコプターに乗る前から、ぼくたちはあまり食べられませんでした。お父さんとお母さんが原発事故の後、言い争っていました。ぼくたちはその様子を少しだけ見ました。ぼくたちの視線を気にして、二人は喧嘩を止めました。けれど、その後も何回か、言い合っていました。だから、ぼくたちはヘリコプターに乗ったとき、少し安心しました。紫陽花はぼくたちの好きな花です。花がいっぱい集まっているから。家に帰ってきて、咲いていたから、嬉しかったです。

第14場

7日目の夜。

森の中。アキラが草むらに隠れている。

シンちゃんとおーりんがやってくる。

アキラ

(小さな声で) ぼくだ。アキラだよ。(やや大きな声で) ぼくだ。アキラだ。

シンちゃん

わっ！

おーりん

ぼくたち。

アキラ

きつと見つかると思ったよ。

シンちゃん

帰るんだ、アキラくん。いますぐ。

おーりん

帰れって。

アキラ

きみたちを探してたんだ。

シンちゃん

ほんと帰ったほうがいいよ、アキラくん。

アキラ

きみたちはまだ顔を塗っていない。明るくなったら。

シンちゃん

危ないから帰ったほうがいい。

おーりん

痛いのでやだし。

アキラ

誰にやられたんだ？ ヒロつつあんか？

シンちゃん

ひどいめにあつたから。

おーりん

ぼくらはしかたなく。

アキラ

ぼくがあいつに何をしたらっていうんだ。ぼくはみんなのことが好きだった。みんなで救助されたかっただけなのに。

おーりん

隊長とケイクんは。

シンちゃん

アキラくんを憎んでいるんだ。始末するって言うってた。

おーりん

明日、きみを狩るつもりなんだ。

アキラ

どうして。

おーりん 知らない。ヒロつつあんも、これは危険な狩り

になるって。

シンちゃん だから用心して、鹿を狙うみたいに槍を投げな

きやいけないって。

おーりん ぼくたちは横に広がって、列を崩さないように

進むんだ。

シンちゃん こっちの端から島を縦に進んでアキラくんを捜

すんだ。

おーりん 見つけたらこうやって知らせる。こんなふう

に。

おーりんが「うおおおん」と、合図の掛け声を叫ぶ。

シンちゃん もちろん、もっと大声で。

アキラ でも、ぼくは何もしていない。火を燃やし続け

ようと言っただけだ。

シンちゃん もう行ったほうがいいよ。

おーりん ここから離れて。できるだけ遠くに。

アキラ きみたちもいっしょに来ないか。三人いれば、

ぼくたちにもチャンスはある。

シンちゃん きみはケイクンのことを知らない。あいつは怖

いやつなんだ。

おーりん それに隊長も。あのふたりは。

シンちゃん 怖いやつらなんだよ。

「ぎっ、ぎっ」と、草を踏む足音がする。

シンちゃん ちゃんと見張りをしているかどうか見に来たん

だ。さ、早く。

アキラ

ぼくは近くに隠れるよ。このすぐ下の草むらに。ぼくは大丈夫だよな？

おーりん

ほら、これあげる。

おーりんはアキラにほら貝の破片を渡す。ほら貝の破片は骨のように見える。

おーりん

拾ったんだ。要らないかも知れないけど。

おーりんとシンちゃんは去ろうとする。

アキラ

で、ぼくを捕まえたらたらどうする気なんだ？

シンちゃん

ケイくんは鹿の骨の先をとがらせていたよ。

おーりん

血がついていたんだ！

おーりんとシンちゃんが去る。

第15場

8日目の早朝。森の中。

シンちゃんとおーりんがグッチ、フックン、いわもっちゃん、マモさん、ケイを連れてくる。

ケイ 確かか？

フックン ほんとにここだと言ったんだな。

いわもっちゃん そこに隠れていると聞いたんだな。

グッチ 騙す気にいるんなら。

シンちゃん ほんとだ。見たんだよ。あつ！

草むらからアキラが飛び出てくる。シンちゃんとおーりんはアキラから遠ざかる。

アキラはフックンを殴り、逃げる。

おーりん ああつ！

いわもっちゃん うああ！

グッチ 言っただろう。やつは危険なんだ。

ケイ 煙でいく。

少年たちはケイの表情を見て恐怖を感じる。

少年たちはケイに言われるまま、島の森に火をつけながら、アキラを探す。あちこちで煙があがる。

グッチがアキラを見つけ、大きな声で叫ぶ。声を聞いた少年たちがアキラの周囲に集まる。

突然、ヘリコプターのエンジン音がする。

少年たちは空を見上げる。

エンジン音がより大きくなる。

1日目、金曜日。15名の少年たちは避難所からヘリコプターに乗ったが、目的地に着く途中で事故に遭い、未明にサニワ島に墜落した。墜落する直前、ヘリコプターの操縦士2名と1名の少年がヘリコプターの外に放り出された。

2日目、土曜日。14名の少年たちは、ヘリコプターからテント、寝袋、食料を出し、ひとつのグループをつくり、浜辺を拠点に暮らし始めた。

3日目、日曜日。3名の少年たちが島を調査した。その最中、少年たちは数頭の鹿を目撃した。食事を摂れなかった1名の少年が死亡し、1名の少年がグループを離れた。

4日目、月曜日。1名の少年の提案で狼煙を上げ、救助を待つことになった。狼煙が火元と見られる火災が発生し、1名の少年が焼死した。その後、少年たちは森に入り、鹿を狩ることに成功した。

5日目、火曜日。少年たちは2匹目の鹿を狩ることに成功した。

6日目、水曜日。少年たちは3匹目の鹿を狩ることに成功した。夕方、捜索船が手鏡による救助信号を受信した。

7日目、木曜日。落石事故があり、1名の少年が死亡した。

8日目、金曜日。捜索船から連絡を受けたヘリコプターがサニワ島に到着した。7名の少年を発見したが、4名の少年の行方はわからなかった。

(参考資料)

『十五年漂流記』 著者〓ジュール・ヴェルヌ 訳者〓荒川浩充 発行〓株式会社東京創元社

『蠅の王』 著者〓ウイリアム・ゴールドディング 訳者〓黒原敏行 発行〓株式会社早川書房

『蠅の王』 原作〓ウイリアム・ゴールドディング 脚本・監督〓ピーター・ブルック

『蠅の王』 原作〓ウイリアム・ゴールドディング 脚本〓サラ・シフ 監督〓ハリー・フック

『肉食行為の研究』 編者〓野林厚志 発行〓株式会社平凡社

『いちえふ 福島第一原子力発電所労働記』 著者〓竜田一人 発行〓株式会社講談社